
むかえ橋 - 春雷シリーズ

大沢 綾子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

むかえ橋 - 春雷シリーズ

【Nコード】

N9560I

【作者名】

大沢 綾子

【あらすじ】

永遠の刻を生きる倉田と千秋。この二人は、あちこちを転々としながら人間と関わりあって生きている。ささやかな人間の営みにときに手を貸し、失ってしまったものを見つけてやりながら、ひっそりと生きている。

春雷シリーズ第三段は、これはもはやBLではないかもしれませ
ん。

倉田光太郎がその民家の広い庭先でふと足を止めたのは、生垣につるを巻きつけながら色とりどりの花を咲かせている朝顔のせいだった。夏の陽はまだ中天には届かない時刻で、しかし今日もずいぶん暑さを約束するほど日差しは厳しい。

白い半袖のシャツからのぞく腕は力強そうで、色の落ちたジーンズの足元は素足に下駄を履いている。肩幅の広い、均整のとれた体格にはひ弱さがどこにもなかった。顎のしつかりとした男っぽい顔立ちは、一昔前の銀幕スターと称された俳優に似ている。

「そついう季節か……」

どこか懐かしそうに呟いて、青い朝顔を眺める。

倉田は、遠い昔に従弟のために朝顔の花をつぶして、色水をつくってやった事を思い出していた。自然と暖かい微笑みが浮かぶ。

「今はもう、そついう遊びをする子供も少ないのだろうな」

そうして再び歩き出そうと顔を上げた視線の先の、生垣が切れるあたりにちょこんと座っている老女に気がついていていた。

専用の椅子でもあるのか。雨ざらしで色あせた椅子に、小さく背中を丸めた老女が座って、こっくり、こっくりと頭を揺らしている。地味なねずみ色のブラウスに、同じ色のスカートを履いて、その手元にはどこかの粗品らしいうちわを持っている。

この暑さに、と倉田はつい気になって歩きながらもその老女に視線をやったままだった。

近づくにつれて、その老女の様子がはっきりとしてくる。

もう、どれぐらい身なりに構わなくなったのだろう。ブラウスのボタンはちぐはぐに留められて、緩んだ襟元からは白い肌着がのぞいている。白髪は乱れて顔にかかり、色の合っていない靴下は足首あたりでくしゃくしゃになっていた。

年齢は、とうに八十を越えているだろうと思われる。細い手足は

水気がなさそうで、それがこの炎天下にさらされている事を倉田は心配した。が、家人が在宅しているらしい気配もする。それならば、自分の出る幕ではないだろうと、そのまま通り過ぎようとした倉田の足元に、老女の手から離れたうちわが落ちていた。それを拾って、倉田は腰をかがめるように老女のしわだらけの指の曲がった手を取り、そつと握らせてやる。

ふつと、老女の目がひらいて視線が合う。

白く濁ったようなぼんやりした視線は、外ではなくて老女の内側にしか向いていないらしい。機械的にうちわの柄を握って、しかし礼を言うわけでもなかった。倉田は気にした風もなく微笑んでから、ジーンズの尻ポケットから取り出した青いハンカチを広げた。

「麦わらでも、お被りなさい……暑さにやられてしまいますよ」

言いながらハンカチを老女の頭に被せた。

不思議そうに顔を上げた老女の瞳が、倉田の顔を真正面から捉えて——そこに初めて焦点の合った意思がのぞく。うちわがまた、老女の手から離れて未舗装の道に落ちた。

少女のような仕草で小さな手を口元にあてて——目やにのついたしよぼしよぼしていた目がくつきりと驚きに瞠られる。その目から涙があふれていた。

「お帰りなさい……お父さん」

震える声でそう言われても、倉田は少し驚いた表情をしただけだった。

倉田ののんびりとした生活に、日課がひとつ増えた。

八十八歳の老女の夫として、倉田は彼女に会いに行く。倉田の仕事は塾の講師で、時間は意外と空いている。臨時雇いの仕事の上に、倉田が教えているのは小中学生相手の歴史と国語で、クラスの人気は知れていた。しかも、毎日ではない。夏休みの集中講座をするほど人気のある科目ではなかった。

老女の名前は、山崎フサ江。自宅で、息子夫婦と孫3人と暮らしている。

最初は胡散臭そうに警戒していた嫁の弘子も、近頃ではお茶菓子を出してくれるほどになっていた。聞けば、これまでは昼夜逆転で夜になると家を抜け出しては、警察の手をわずらわせる事が多かったらしい。それが、倉田が日中に来るといので起きているようになり、しかも少し言動もしっかりしてきた。嫁の立場としては、少しほっとしているのだろう。

「すいませんねえ……まだ、お若いのおばあちゃんの相手なんかさせて」

五十を幾つか越えたぼつちやりした身体を丸めて、弘子はいつも倉田に頭を下げる。三十七、八にしか見えない倉田が人違いのまま調子を合わせてくれる事に、本気で感謝をしているらしかった。

しかし、倉田はその家には上がらない。

いつも玄関で声をかけて、そのままぐるりと裏庭に回っていく。

その濡れ縁が倉田のいる場所だった。

近頃では、髪もきれいに整えてきちんとした身なりで彼女は倉田を待っている。その日は、薄墨色の朝顔の柄の浴衣姿だった。蚊遣りが足元で細い煙を立ち上らせて、倉田が縁側に腰を下ろすとうちわで風を送ってくれた。

彼女は、倉田を戦死した夫が帰ってきたと思い込んでいる。

「あのお写真は、そろそろ外さないといけませんねえ」

仏壇の上にある夫の写真を見上げて、おつとりと言つのを倉田はやさしく遮る。確かに、倉田の古風な顔立ちは山崎氏に似通った部分があった。

「構わないから、そのままにしておきなさい。逆に長生きするような気がするから」

そう言つてやると、うちわを口元にあててフサ江が嬉しそうに笑う。今は確かに老醜に打ち勝つすべもないが、フサ江は若い頃には清楚な美人だっただろうと倉田は思った。

倉田が訪れるようになってから、気持ちにハリが出てきたのか濁ったように動きのなかった顔に、表情が出てくるようになっていた。フサ江との会話は、この二十一世紀ともなれば想像するのも難しい時代の事ばかりだ。それでも、倉田はどういうわけかあまり戸惑いもせずに話を合わせてやっていた。徴兵検査だ灯火管制だ、空襲だの、陸軍さんだのと言われても別に動じる風もない。いつも縁側に腰をおろして、笑顔で頷いている。

フサ江の気がかりは、当時夫婦でやっていた豆腐屋を空襲で失った事だった。

「本当に、お父さんが帰ってこられるまで守っていこうと思っていたのに」

と悲しそうに言うのへ、倉田はそつと老女の腕をさすって笑ってやる。

「気にする事はないよ。それより家族が元気でいるのが一番だ。おまえはよく頑張ったよ」

「あら、いやだ……恥ずかしい」

倉田は本気で言っている。女手ひとつで3人の子供を抱えて、戦後の混乱期をよく乗り切ったものだと思った。山崎家の子供は、上二人が女で末っ子が男。長男はフサ江の本物の夫が戦地に出て行った時にはまだ、お腹の中にいた。だから、彼女は軍事郵便のハガキに性別を書いて送って、夫が命名してくれるのをずっと待っていた。そのハガキが着いたのかどうか、夫は返事を出してくれたのかどうか、それもフサ江の大きな悲しみだった。

「あなたの名前を頂いてね、武郎とつけたんですよ。だって、何か月待ってもお返事がなくて、お舅さんがつけて下さったの」

そうか、と倉田は穏やかに言う。

「きつと、郵便事情が悪かったのだらう。ちゃんと受けとって、大喜びをしていたら中隊長殿も一緒に喜んで下さったよ」

ああ良かった、と肩の荷をひとつ下ろしたようにフサ江が微笑む。そういう会話ばかりを、二人はしている。まるで、そこだけ時代

が逆行して昭和の始めに戻った感があつた。しかも、倉田は無理なく演じている。

そういう光景を、たまに冷茶などを出しにくる弘子が目撃をして、奇妙な気持ちになった。姑である義母の、そういう可愛い姿というものを見た事が、彼女は一度もない。倉田が来るようになって、それまではこんなお荷物、と思っていた義母に初めて同情に似たものを覚えていた。

子供を抱えて、夫を亡くす——そんな不幸を乗り越えてきた人なのだ、と改めて考えていた。

それにしても、と倉田を見るたびに弘子是不思議になる。

年齢はどう見ても自分よりも若い。が、それを感じないのだ。ただ落ち着いているだけではなく、老成した雰囲気は漂っていて弘子でさえ、ちよつと甘えてグチでもこぼしたくなってしまうような男だった。

倉田の帰り際にはいつも、小さな騒動が起こった。

「ね、お父さん——武郎に会っていく事は出来ないんですか。上官の方にお願ひして、一晩ぐらい泊っていけませんか」

その時だけは、倉田も少し厳しい顔つきをする。子供に言い聞かせるように、ゆつくりと毎度同じ事を話してやった。

「いまは、大変な時だからね。そうそう勝手ばかりも出来ないのだよ。こうして、時々会って来いと言つて下さっているのは、特別な事だ。だから、ちゃんと出来ぬ苦勞もしなくてはいけないよ」

それでフサ江は納得をして、倉田を縁側から見送るのだった。

倉田の帰る家は、何の変哲もない2階建のアパートだった。

昼頃にそのアパートを出て山崎家を訪れ、その後出勤をする。戻つて来るのは遅いが、その部屋の窓からはいつも灯りが漏れていた。そこで倉田の帰りを待っているのは、恋人だ。ほっそりと華奢で一見すると人を惑わすような女性とも男性ともつかない美貌を持つ

ている。遠い昔に誉めてやったのばした髪を切りもせず、そして時々倉田はその髪を編んでやった。

その恋人千秋の事を、倉田は自分の人生にたった一輪天が与えた彩りだと思っている。千秋がいなければ、いつ終わるとも知れない人生を孤独に生きていくしかなかったからだ。その事に不満を感じたり、苦悩したりする時期は過ぎてしまった倉田だが——名前を変え、場所を変え、そうして転々としながら生きていくには、この世はあまりに悲しみに満ちている。かといって、倉田にはそれを変えるだけの力はなかった。あつたとしても、悲しみの種を拾って歩くには多すぎる。

倉田に出来るのは、同じように生きてくれる恋人の笑顔を大事に守ってやる事だけだ。

狭い二DKのアパートの部屋には、いつでも季節の花が飾ってある。千秋がアルバイト先の花屋の売れ残りや枯れかけた鉢を持ち帰ってくるからだ。不思議な事に、千秋が世話をしてやれば花はしばらく寿命をのばした。

「鉄扇か……」

窓際に置かれた鉢に、大きな青い花が咲いていた。おかえりなさい、とその背中に頭をつけて、恋人が細い腕をまわしてくる。腹の上にある華奢な手を倉田は撫でて、身体を捻ると恋人を抱く。やさしい微笑が返ってきた。

その微笑みに、フサ江の悲しみが重なる。

倉田も、この千秋にフサ江と同じ悲しみを与えた。長い——長い慟哭と絶望の淵に千秋をおいて姿を消し、やっと再会した時の恋人の表情は忘れられない。それ以来、倉田は二度と千秋を置いてはどこへも行かない、と決めている。どのみち、倉田と似た人間はこの世に千秋だけだ。この白い手を離してしまう事は出来ない。

「また、フサ江さんに会ってきた？」

「……ああ」

短く答えると、千秋は倉田の胸に頬を寄せる。白い横顔に、哀し

げな表情が宿っていた。

「もう……戦争は、いや。みんな大事なひとを失うから。でも、生きていくのか死んでいるのかわからないのはもつと辛い。だって、残された者はただ、待っているしか出来ないから」

尊いもののすべてがそこで断ち切られた悲しみを思い出したのか、いつそう頬を押しつけてくるのを、倉田は肩を撫でてやる事で慰めた。

「泣くな……千秋。そうやって、出征していく人間にも同じ気持ちがあるのさ」

「……うん」

倉田は白い頬についた涙の筋を拭ってやり、そのままそつとくちづけていた。

夏もそろそろお盆の季節に差しかかる頃、倉田がいつものように山崎家を訪れると玄関先で、なにやら諍いの声がしていた。一方の女の声は弘子のもので、もう一つは男のものだが倉田には聞き覚えがない。

「そうやって！ あなたはいつも仕事、仕事で！」

という甲高い弘子の叫びは、門柱の立つ表にまで聞こえてくる。対する男の声は消されがちで、はつきりしない。

（今日は……日が悪そうだな）

フサ江には可哀想だが、このまま仕事に出ようと踵を返しかけると、ガラリと玄関の引き戸が乱暴に開けられて、中から初老の男が一人飛び出してきた。

「俺が働かないで、いったい誰がお前たちを食わせるんだ！」

捨て台詞を吐き出して、怒りのままの表情で倉田に向かってくる。洩れ聞こえた話の前後で、それが山崎武郎だとわかっていて。白髪混じりの髪に、ごつとした四角い輪郭。鼻は大きくて、唇は一字に結ばれている。目元の辺りにだけ、フサ江の面影があった。

すれ違ふ時、じろりと胡散臭そうに睨まれて、倉田は内心で苦笑する。そして、ワイシャツ姿の背中を見送った。

一瞬ためらったが、倉田はやはりフサ江に会つていこうと門をくぐっていた。玄関先に立ち、開いたままの引き戸からのぞくと上がり框に弘子が座ったままだいる。そうして、突然自分の上に広がった影に怯えるように顔を上げていた。

目尻のしわの隅に光っているものが、倉田に見える。

「ああ……倉田さん」

ほっとしたような、恥ずかしいような声音だった。ちょっと鼻をすすって、人差し指で目尻を拭うと疲れたような微笑を浮かべていた。

「聞くつもりでは、なかったんですが」

倉田が言つと、嫌だ、やっぱり——と弘子は情けない顔をする。ため息をついて立ち上がると、どうぞ、と上がり框を空けていた。

「いえ、私はいつものように……」

「おばあちゃんね、今朝方入院しちゃったんですよ」

だからどうぞ、と再度言われて倉田はためらいながら下駄を脱いでいた。

「前から、心臓が悪かったんだけど……」

ちやぶ台の上に両肘をついて、麦茶のグラスをもて遊びながらため息混じりに弘子が言っていた。それは、どこか独白のようで——倉田はただ、聞き役になっている。

「毎日、毎日のこの暑さでしょう。去年にも発作が起きて」

本当はね、入院道具を持っていかなきゃいけないのにね、と弘子は呟く。パーマをあてた髪が乱れて、その後れ毛がいつそう彼女を疲れたように見せていた。

「主人ったら、それでも会社に行こうとしてたんですよ。こっちは、救急車やら何やらでキリキリ舞いをしていたのに。まあ、それでも病院までは付き添って」

落ち着いたようだから、仕事に行く——と一旦自宅に戻ってきて

の喧嘩であつたらしい。それらの話を、倉田はゆつたりと座布団の上で胡坐をかきながら聞いていた。

「自分の母親なのにねえ……」

そこまで言つて、弘子が恥ずかしそうに笑つていた。

「もうねえ、あたしつたら、なんでこんな事を若い人に……忘れてくださいよね。こんなおばさんの言う愚痴なんか。世の中、そんな夫婦ばかりじゃないんだから。倉田さんが悪いイメージなんかもつて、結婚しないと思つたらおばあちゃんに怒られるから」

そうやって恥ずかしがつている様子は、まるで若い娘のようだと倉田は思う。そう思うと、自然に微笑が湧いていた。

倉田の微笑みは、心底あたたかい。

恋人の千秋も、ほつとする、といつも言つほどだ。

「ご主人は……怖いのでしょうか」

居間の座敷から庭を眺めながら、倉田は言つた。

「自分の母親が……すっかり者の母親が、だんだんと衰えて息子の事さえ満足にわからなくなつていくのが、怖いのでしょうか。元気で頼もしい母親ではなくなるのが。それが自然の摂理だとしても、いつまでも澁刺とした母親でいて欲しい。ご主人の場合は、父親がいないままだから、余計にそう思つてらっしゃるのでしょうかね」

弘子の顔が、驚いたように倉田を見ていた。

「そう思いませんか。仕事に逃げているような」

倉田が言つと、こく、と頷いて片手を頬にあてていた。

「そうかもしれませんねえ……」

そして、ボーン、ボーンと鳴る時計の音に慌てて立ち上がった。

「いやだ、あたし……おばあちゃんの用意をしなくちゃ!」

手伝いましょう、と倉田は言つて、結局はおなじ道のりだから、と入院道具を持ってやつた。

病院のベッドは、フサ江にとっては大きすぎるように見えた。心臓発作はそれほど酷いものではなく、数日入院をして経過観察という事らしい。

倉田が塾の始まる前にその病院に寄ると、その日のフサ江はしっかりしていた。いつもの幽明の境にいるような状態でもなければ、倉田を夫と間違ってもいない。

ベッドの傍らに座っている倉田を見て、フサ江はごめんなさいね、と謝っていた。

「ずっと、お父さんの役をやらせてしまつて」

フサ江の言葉に、倉田はまた例の暖かい微笑を見せていた。

「私は、楽しかったですよ。戦時中の……山崎さんが体験した戦時中の事は、私も体験しなかったので詳しくは知りませんがね」
そう答えると、おやまあ、とフサ江が声をあげる。

「だったら、倉田さんはどういう戦時中をご存知なんですよ」

「さあ……言っても、誰も信じませんよ」

フサ江が興味をひかれたらしい。

再三尋ねられて、倉田はとうとう答えていた。

「私が知っているのは、日清・日露戦争ですよ……ほら、信用しない」

倉田は、胡散臭そうになったフサ江に向かって暖かい笑い声をあげていた。

「宇品から船に乗ってね……朝鮮半島へ。私は東北の生まれで、大予備門の時に初めて海を見たが、しかし見るのと乗るのは大違いだね。軍艦の廁が洋式だったのに、しばらく慣れずにずいぶん困った」

フサ江は、鈍い驚きの中にいるようだった。

「……本当に」

「さあ……どうだろう。私が本当は幾つで、いつ生まれたかなど、たいした事ではありませんからね。それとただ、私が冗談好きな男で山崎さんを騙しているのかもしれない」

倉田は腕組みをしながら、フサ江を見下ろしている。

小さな頭が枕に埋もれるように乗っついていて、フサ江の目が見返していた。

「そうは思えませんよ。だって、あたしなんかを騙したところで、何の得もないでしょ」

とフサ江が言うのに、倉田は微笑む。

その微笑みに、フサ江が本当によく似ていて、と呟いた。

——主人に赤紙がきたのはねえ、三十五の時でしたよ。

徴兵以来の召集令状だった。歳も歳だし、こないと思っていた矢先の事だ。三十五といえば、もはや老兵である。フサ江は二十二歳町内こぞつての万歳の声に見送られて、後ろ髪をひかれるように振り返りながら汽車に乗った夫を、娘ふたりと見送った。

「心細くて、心細くて……主人はやさしい人で、歳も離れてましたからねえ。ずっと、安心して頼りきっていたから」

フサ江のロマンスは、倉田にとっても可愛いものだった。

豆腐屋の三代目だった山崎武は、夏の盛りに大きな自転車の後ろに売り物の豆腐を乗せて、ガラ〜ン、ガラ〜ンと鐘を鳴らしながら民家の間を走っていたのだという。夏の紺を尻っぱしりにして紺の前垂れをつけて——大正から昭和初年の日本というのは、まだまだそんな風景だった。靴など履いて洋装をしているのは、都会の間だけだ。一步離れれば、子供などは坊主頭に裸足が当たり前前の時代である。

それでも、フサ江はそここの家庭に生まれて女学校に通っていた。和裁の学校で、夏の陽盛りの道をしつけを付けた浴衣を抱えて帰るところで、その日差しにやられて倒れた。その倒れたところへ、山崎武が通りがかって助けくれた。

すぐ近所の家に声をかけて、その家の者が戸板を抱えて来るまでのあいだ、売り物の豆腐を手ぬぐいに包んで首の後ろを冷やして

くれる。周囲に集まってくる野次馬の中、フサ江は面もあげられないほどの恥ずかしさを感じていた。裾が乱れていないか、おかしい格好ではないか、そんな事ばかりが頭をよぎる。

当時というのは、そういう時代だった。

—— 対一で男と話をするのさえ、ふしだらだと烙印を捺される時代—— だから、フサ江は軽々と自分を抱えて木陰まで運んでくれた男の腕に、小さなときめきを覚えてしまふ自分を恥ずかしいと思う。

どうしたらいいのかわからないでいると、野次馬の中に、近所の者がいてくれた。

—— フサちゃんじゃないか

そう言つて、家人を呼びに飛んで行つてくれる。それから後は、早かった。すぐに戸板がきてフサ江はそばの民家に移された。移される時、別れ際にやさしく言つてくれたひとことが、フサ江の胸にはずつと眠っていたのだ。

—— お嬢さん、麦わら帽でもかぶったほうがいい

それが縁で、フサ江は山崎家に嫁いだ。

主人となつた山崎武のやさしさは、山崎家の家風であつたらしい。豆腐屋の朝は、べらぼうに早い。朝の味噌汁の具に、と早くから買いにくる客があるから、仕込みはまだ暗いうちから始まる。夏場はまだいいが、冬の作業場は水浸しで冷え込み、しかも立ちっぱなしになる。

フサ江が最初の子を身ごもつたときには、皆でフサ江を甘やかしてくれた。

—— なにかあつたら、大変だ。いいから、寝ておいで

つわりで食欲がないとなれば、贅沢にも卵豆腐をつくってくれた。氷あずきや、ところてんも季節に関係なく仕事の合間につくつて、食べさせてくれた。

その当時、そういう男というのは珍しくて、フサ江は本当に驚いた。実家の父親などは、台所に顔ものぞかせないような人だったからだ。

しかし、幸せだった。

ひとつだけの気がかりといえば、男の子に恵まれないだけ、という事ぐらいで夫婦仲も姑との仲も良かった。それも、三人目のときには——この子はきつと男の子だ、と確信していた。だから、フサ江は周囲にひやかされながらも男ものの古着や浴衣をほどこいては、せつせとおむつを縫ったり、うぶ着を用意した。

——女の子だったら、どうするんだね

——いいえ、絶対に男の子。わかるんですよ

——そんなものかねえ

そんな会話が、仕事の一段落した昼間の時刻によく交わされた。

「戦争はもう、本当に嫌ですねえ……」

ベッドの上でそう呟いたフサ江の今の気がかりは、自分が死んだら主人に会えるのだろうか、という事だった。

「もう、こんな歳なのに……怖いと思っちゃうんですよ。それでもどこかで主人に会えたら手をひっぱってくれるような気がして。安心だろうと思うんですねえ」

「……大丈夫でしょう」

倉田は、妙に確信あり気にそう言う。ちょっと驚いた顔をするフサ江を見下ろして、やさしい笑顔になっていた。

「それほど心細いなら、途中までは私が手をひいて差し上げましょう」

「おや、まあ……本気にしてしまいますから」

「約束しますよ」

ふわふわと布団の上にあるフサ江の小さな手を叩いて、倉田は立ち上がった。

病室を出ると、そこには山崎武郎がつっ立っている。倉田の顔を見て——呆然としていた。

「……本当だ。死んだ親父に、似てる……」

倉田は微笑んで会釈をすると、隣をすり抜けようとしていた。その腕を、山崎氏が思わず、といった感じでつかんでくる。その手を見下ろして、倉田は言っていた。

「私のことに驚いているより、お母さんとお話しなさい。幸い、今日はとても頭がはつきりされている。その事の方が、私には大切だと思えますよ」

倉田にしては、少し厳しいものを含ませた言い方だった。それにはっとしたのか、慌てて手を離していた。

「おふくろ……俺が、わかるのかな」

自信なさ気に問いかけてくる。

だから、倉田は今度はやさしく微笑んでやった。

「おわかりになりますよ」

そして、山崎氏をそこに残して病院を離れた。

「……なみだ雨」

倉田の隣で、千秋が空を見上げて呟いていた。

場所は、フサ江の入院している病院の敷地にある、桜の木の下である。真夜中にも関わらず、病室の窓に明かりが灯っていた。上空では、恐ろしい早さで雲が渦巻いて流れ始めている。細い雨が、街灯の光を受けて銀色の糸になって地面を濡らし始めていた。

その雨に濡れながら、倉田は千秋の華奢な肩を抱いて病室の窓を見上げている。千秋も同じように顔を上げて、そのしろい面を雨に打たせていた。

「もうすぐ、引き潮だから……」

と、千秋が言う。

「そうだな」

倉田は短く答えて、その時を待っていた。

山崎フサ江の入院は、当初の予定から大幅に長引いた。入院中に再び心臓発作を起こしてしまい、それが原因で文字通り幽明の境を

さまよう事になっている。彼女が息子と正気で話が出来たのは、おそらくあの日が最後だっただろう。

ふいに、倉田の手のひらの中で千秋の肩がピクン、と緊張する。

倉田は静かに、千秋を見下ろした。

その美しい顔は、目を閉じてどこか苦悶の表情を見せていた。微かに開いた紅いくちびるのせいで、それはこういう場所には不似合いなほどエロティックでさえある。

「……千秋」

「待つて、光太郎さん……ああ、もうすぐ離れていく」

わかった、と倉田は頷いていた。

倉田は、山崎フサ江との約束を果たすためにここにいる。千秋はそれを手伝うために、一緒にいるのだ。倉田よりも、千秋のほうがあの世とこの世のあいだに架ける道を、開きやすい性を持っている。はるか昔から——物事を成すには陰陽ふたつが揃わなければならぬ、というのが東洋の思想のひとつになっている。男は陽、女は陰——ひとりが光ならば、もうひとりとは影。

倉田の場合は、千秋がその影だ。

「……開いた」

ぱちり、と千秋がその漆黒の瞳を現す。その視線の先は夜の虚空を指していた。

「しばらく、行ってくる」

「……うん」

すぐに戻る、と倉田は言っただけで千秋の不安を消すためにくちづけ。その、くちづけている倉田の輪郭がぼやけて曖昧になり——やがては青黒く光る一尾の龍に成っていた。

なぜ、自分がそういうモノなのかはもう、倉田にはどうでもいい問題だった。なぜなら、そうであるからこそ、倉田は死ぬこともなく生き続けていられる。それは、とりもなおさず、恋人の千秋と未来永劫一緒だという意味なのだ。千秋も、似たような存在だ。死ぬ苦痛を味わう事は出来ても——死ねない。それがどういう慟哭をも

たらずかは、倉田でなければわかってやれないのだ。

そして倉田は、山崎フサ江を迎えに行った。

彼女は、二十二歳の姿で心細そうにその入口の前で逡巡している。倉田は背後から近づいて――再びひとの姿になって、手を差し伸べてやる。

「……あら、まあ！」

若い頃の彼女の声は、まるで鈴を転がすように愛らしい。

「約束したでしょう……途中までは、私が手をひいて差し上げます」

「はい。よろしく願います」

小さくおじぎをして、彼女はしろい手を倉田に預けていた。

「どんな気分です？」

ゆっくりと歩き出しながら、倉田は訊いてみる。返ってきたのは、美しい笑顔だった。

「あんなに怖いと思っていたんですけどねえ……」

意外そうな声だった。むしろ、少女がはしゃぐように華やかでさえいる。倉田はやさしく微笑んでいた。

「それならば……きつと、むこうにご主人がいらっしゃるでしょう」

そう言つと、幸せそうな微笑がフサ江の頬にこぼれたのだった。

そして、倉田は手をひいたまま二つの世界に架かる橋を渡り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9560i/>

むかえ橋 - 春雷シリーズ

2010年10月8日15時21分発行